

異郷の景色

西江雅之



晶文社

著者について

西江雅之（にしえ・まさゆき）

一九三七年東京に生まれる。早稲田大学政経

学部卒業。言語学、文化人類学専攻。

著書『花のある遠景』（せりか書房）

いよろけし
異郷の景色

一九七九年一月二〇日初版

一九七九年三月一五日二刷

著者 西江雅之

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一・二二

電話東京二三五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九九

中央精版印刷・美行製本

© 1979 Masayuki Nishie

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

異郷の景色

西江雅之



晶文社

ブックデザイン
平野甲賀

異郷の景色
目次

新宿 季節はずれの街 9

オアフ ワイキキからすこし離れて 29

ティファナ 国境の町 47

メリダ マヤの遺跡にて 67

台北 山地人の村 87

ロスアンゼルス 砂漠のうえの街 107

吉祥寺 “マーケット”のある街 127

神保町 雨あがりの古本屋街

139

台北 山人の村再訪

153

サンフランシスコ 中国人街のことなど

177

豊島園 フィールド・アスレチック体験記

189

ナイロビ 裏町の女

201

あとがき

初出一覧

224 223

新宿季節はずれの街

鐵道が運んで来るんさ、

空^{そら}の中に、胸痛む^{いた}節^{ふし}を一つ。

列車が通るたびのことだが

どっかに俺は行っちみたい。

——ラングストン・ヒューズの詩か、アメリカの……。

——そう。そして、あの頃の新宿の……。

——あのコーヒー屋で。僕等は、こんな気分で夜を過し、まだ薄暗い夜明け前の街に出て、結局は、どこへ行つたかつて言えば、旅になんかは出ないでさ、みんな一番電車で自分の家や下宿やらに戻つて行つたんだよなあ。

例えば「Y」という名のコーヒー屋があった。そこは、ジャズを売り物にしていた。

二階には、ややくたびれた感じの椅子が雑然と置いてある。数人の大学生が、仲間に女の学生も二、三交えて、思い思いの格好で腰をおろしている。洋画でも観て来たのだろう。偽りの愛とは本当の愛

なのかどうかといったような、当時もそして現在に至るまでも、わたしの理解をはるかに超えるようなテーマを、彼らは尽きることなく一晩中討論し続けている。中にはゾンザイが、ゾンザイが、などと大声で喚いている学生もいて、盗み聞きしてみると、彼はどうかやら「存在」について仲間に話つきかせているらしい。サルトルの哲学の本を持って歩くことが流行していた頃なのだ。

そうかと思うと、薄暗い部屋の片隅には、十五、六歳の女の子が一人、まるで猫のように体を丸めて、両膝を抱え込み、椅子の上で眠っている。

——あの子は、きのうの朝から来ているんだ。と、誰かが、誰に言うともなく、教えてくれる。家を出て来た子なのだろう。家から逃げては、家に連れ戻され、そんなことを何度でも繰り返すうちに、その子もちゃんと一人前の女になって行くのだ、とわたし達は思っている。

木造りの机の上には、所々、タバコの火でつけた黒い焦げ跡や、ナイフで彫りつけた人の名が見えている。そして、その茶色の机の表面を、ゴキブリが一匹、足早に横切って行き、真中あたりで誰かの名前の彫り傷に行きあたり、しばらく立寄り、触角でその傷跡をかるく叩いて中を探るような動作を見せてから、また何事もなかったかのように足早に立去っていく。わたしは読みさしの本を置いて、それを見送る。それからひょいと向うを見れば、それだけではない。他にも四、五匹の小さなゴキブリが、まるで行儀の良い子供達の行進のように、一列にきちんと並んで、適度の間隔をお互いに保ちながらトコトコと椅子の縁を渡って行ったりしているのだ。

その店には黒人の客も多く来ていた。立川の基地辺りから来たのだろう。夜の九時か十時をまわると、二人、三人と組になって、踊るような足どりでドアをくぐって入って来るのだ。そして音楽を聴

きながら、ある者は本を読みふけり、ある者は連れの者や、店内の別の客と他愛のない話をしたりする。

……ホームシック・ブルースを、感じるってのは痛いもんだ。

泣き出しそうな心をこらえ、口を開いて笑うんだ。

ラングストン・ヒューズのこんな詩も、わたしはそこで覚えた。黒い皮膚をした兵隊が、手垢にまみれた本を掂げ、あの特色のある黒人のハスキーな声で、わたしにその詩を読んでくれたのだ。

確か、その頃、セロニアス・モンクという名のジャズのピアニストがいて、わたしは彼のレコードを聴くのが好きだった。とはいえ、わたし自身はジャズに詳しいというどころか、ただなんとなく音に全身が包まれているのが好きだということだった。そんなわけで、誰が演奏していても、どんな曲が鳴っていてもわたしはいっこうにかまわなかった。しかし、それでも彼の曲はとりわけ印象が深かったということなのである。

それに、セロニアス・モンクの曲といっても、それはわたしがリクエストするのではなく、偶然に鳴っているのを聴くだけなのだ。それは、特色のある演奏だった。暗闇の中で、失くしたのを見つけて出そうとでもするかのように、彼は手探りで鍵盤から音を一つ一つ拾い出しては室内に抛り出していた。そして、一つの音から次の音に移るまでには、ちょっとした沈黙の時があり、その沈黙の合間に、部屋の窓ガラスを通して遠くの夜汽車の汽笛の音が忍び込んで来た。

わたし達は、どういうわけか、夜明けになると店を出たものだった。一番電車で家に帰らなければ

まづいような気がしたのだ。

コーヒー屋の狭い階段を降りて外に出ると、夏の朝は肌寒かった。細い路地を抜けて、靖国通りに出、既に白く明るさを増した街の景色を背に駅に向うと、もう起きている人に路上で出会う。やばった衣着物を着たおばさんが細い木の棒で店の鑑戸を押し開けていたり、灰色のズボンを着け、灰色のシャツを着て、首に手ぬぐいを巻きつけた労働者風の老人が黙々と仕事場に向って歩いていたりする。そうかと思うと、まだ眠そうな様子の若者が、水道にホースをつなぎ、どういう理由かは知らないが、店の前に水を撒き散らしていたりする。

朝の訪れは大急ぎといった感じがした。天気さえよければ、でこぼこした建物の屋根を越えて、市ヶ谷の辺りから太陽が昇り、たとえ今ほどではないとしても、それを合図に新宿の街頭はめまぐるしく動き始めていた。

——あれは、もう十二、三年も前のことになる。新宿も変わってしまったなあ。

思い出とは、人が捨て去った物のことだ。そんな気持が、わたしの心の中にはいつもある。だから、そんなことを言うその友人は、既に新宿とはきっぱり縁を切り、単なる傍観者になってしまったのだらうかとわたしは思う。

——変わったのは、君の方さ。新宿の方ではないよ。時が経ち、君が変われば街の景色が変わり、街行く人の顔ぶれが変わって見えてくる。ただ、それだけのことなのさ。と、わたしは言う。

最近、ステーション・ビルの近くで、エメちゃんに出くわした。ほぼ十年ぶりである。

ある日、行きつけの「V」コーヒー店からひょっこり姿を消してしまったので、エメちゃんも河岸を変えたのか、または新宿から遠退いて行ってしまったかと、当時、そこでの顔見知りの連中はしばらくは噂していた。だが新宿では、誰が遠退いて行こうが、誰が新しく入って来ようが、そんなことは問題ではない。その場に居合わせた人だけが重要なのだ。新宿は通行人の街なのであり、彼女もその一人として姿を消しただけだった。

ある人が、人生のある時期に、散歩の途中で偶然にさしかかり、ふと面白い物をそこに見つけ、その後はちょっとした時間があれば自然に足がその方向に向いてしまうといった、お気に入りの路地、それが新宿の街である。人それぞれが自分の年齢や性別、職業や趣味などによって好みの路地を選んでいる。ある人のお気に入りの路地も、他の人にとっては当然、何ら興味を持ち得ない場所である。また時間が経てば、好みも変わり、人はさっさと別の路地へと移って行く。場合によってはもう二度とその界限に戻らない。

新宿に入りびたりの人というのは普通、町内の数百の路地をことごとく知っているというのでもない。その反対に、ほんの二、三本の路地を何カ月も、何年も行き来する人のことなのだ。一つの店に何カ月も何年間も通い続ける人のことなのだ。そして、それにもかかわらず、その人は結局はその行きつけの路上でさえも、店内でさえも、いつになっても他所者のままなのである。

その時、五月だというのに、エメちゃんは毛皮の襟巻が付いたコートを着ていた。上天気だという

のに、足元は夏向きのレイン・シューズだ。

——季節はずれで、上下ちぐはぐか。相も変わらずだ。と、わたしは思う。彼女は、わたしを認めた途端、

——あーら、やだ、わたし。こんな所で出会っちゃって。と、人目もはばからず大きな声で話しかけてくる。彼女は、わたしに出会ったのがいやなのでもないし、出会った場所は「こんな所」などと謙遜して言うような所でもない。久し振りで思い出したがこれはエメちゃんの癖なのだ。

——ばーかみたい。わたしって。去年、結婚しちゃったのよ。わたしも、すっかり社会的になっちゃったわ。奥さんですもの。でもいヤーね、わたしって。浮気しているのが、最近、主人にわかつちやったのよ。どうしたらいいと思う。でも、何で、あの人はそんなことで文句を言うのかしら。わたしは彼を愛しているのよ。自分の主人ですもの。それに、もう一人の方は単なる性欲の対象でしかないのに。男の人って、心理がわからないわー。

口紅を真赤に塗った大きな口を開けて、表情たっぷりに話すエメちゃんの言う事は、とりとめもない。話し振りが、こうして聞いていると十年前と変わらない。それに、「浮気」などという世俗的な単語を除けば、「社会的」だの「愛している」だの「性欲の対象」だのといった言葉の使い方。彼女はいまだに「インテリのエメちゃん」なのだ。エメちゃんは、もう数年間も「V」コーヒー店には行っていないと言った。二時間も三時間も、コーヒー一杯でねばって、わけのわからない大学生なんかと幼稚な議論をしているとはじまらないと言うのである。

——今はね。コーヒー屋に入るとしたら、自分一人で静かに本が読める所と決めているのよ。今頃